

図書館だより

名古屋経済大学 図書館
名古屋経済大学短期大学部

2010.11 Vol.60

Every extension of knowledge arises from making the conscious the unconscious.

Library News

Our business in this world is not to succeed, but to continue to fail in good spirits.

Library News

Library News files
What is done can't be undone.

contents	
目次	

特集
貴重本紹介

貴重本紹介シリーズ 12 「実用 織物の研究」西村益者著 日本織物研究会発行(昭和25年2月発行)



日本の国力向上を目指す上で、また、日本の製造業全体が大きく成長する過程において、繊維産業は先駆的な役割を果たしてきました。戦後は壊滅的な打撃を受けますが、朝鮮動乱による特需の効果により、綿紡績や紡毛紡績を中心とした繊維産業から復興が開始されます。また、天然繊維だけでなく、戦前に開発されたレーヨンを始めとし、絹に変わる繊維として、ナイロン、ポリエステル、アクリルなどの化学繊維が華々しく開発されます。これらの新しい繊維は既存の繊維と混紡されて、バラエティに富んだ織物を生み出すことになりま

す。このような背景のもと発刊された本書は、サンプル付きの織物解説書であり、多種多様な繊維から織物までを網羅した内容となっています。これまで、各種繊維の製造工程、整理、染色など部門ごとの専門書はあっても、繊維から糸、織物にいたるまで系列的に実用見本を添付し、解説されている書籍はなかったでしょう。具体的には綿糸、金糸、銀糸など糸サンプル、絹やレーヨンなどの撚糸サンプル、クレープ、ジョーゼットなど絹織物のサンプル、羽二重、西陣など著名な織物サンプルなど当時の多岐にわたる貴重な実物サンプルが添付されています。全366ページは本文以外に口絵図版1枚と実物見本97ページ、当時の企業の様子がうかがえる巻末広告34ページで構成されています。第一部、第二部から成り、本学図書館には第一部が所蔵されています。図書館2階に高機の織機が設置されていることをご存じでしょうか?ファストファッション全盛の今日この頃ですが、長い時間をかけて丁寧に作られたぬくもりのある織物、スローフードならぬスローファブリックに触れる良い機会として、貴重本とあわせて是非ご覧いただきたいと思います。

随想	2
経済学部教授 宮川 昇	
読書ガイド	4
経済学部教授 大野 隆	
経営学部准教授 中村 壽男	
人間生活科学部教授 星野 政明	
短期大学部教授 日比野光敏	
学生コーナー	6
人間生活科学部 平松 良太	
法学部 江坂 美咲	
経営学部 山田 祐歌	
短期大学部 本山 ゆり	

図書館からのお知らせ 8



▲法隆寺蜀江錦の複製



▲図書館2階展示の織機



▲抄織糸



短期大学部 教授
光松 佐和子

随
想



プラトンとアリストテレスが 携えている本



経済学部 教授 宮川 昇

▼写真1「アテナイの学堂」全体画像



私は、十数年前からパソコンの待ち受け画面にずっと同じ画像を使っています。それは、古典ギリシア・ローマ文学を愛好し、ルネサンス文学を研究している私には、まさしく西洋学問の「曼荼羅」(仏教的宇宙の真理を表すために仏や菩薩や守護神などを一枚に描いた図画)と呼ぶに相応しい美術作品です。その作品とは、『アテナイの学堂』(写真1)と名付けられたラファエロ・サンティによる壁画です。

ラファエロといえば、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ・ブオナローティと並び称されているルネサンスの三大画家であることは誰もが知るところです。ラファエロは、時のローマ教皇ユリウス2世からの依頼により、バチカン教皇庁の四つの部屋の壁にフレスコ画を創作しました。その四部屋は「ラファエロの間」と呼ばれ、その中の一つ「著名の間」という部屋の壁面に、「西洋古典の曼荼羅」と私が勝手に呼んでいる『アテナイの学堂』が描かれています。この壁画には、ソクラテス、ピュタゴラス、アルキメデス、ディオゲネス、プトレマイオス、エピクロスなど二十数名の古代ギリシアの哲学者や科学者が描かれています。そしてその作品の中央には二人の哲学者が描かれていて(写真

2)、指で天を指しているのがプラトンで、手のひらを地面に向けているのがアリストテレスです。プラトンのその仕草は観念論哲学を表し、アリストテレスの仕草は経験論哲学を表してると解釈するのが一般的です。またそのモデルに関しても、プラトンがダ・ヴィンチで、アリストテレスがミケランジェロであったといわれています。その他にも、この作品に関しては、いろいろな研究者がいろいろな方面からいろいろな意見を出しています。しかし私がこの作品の中で最も興味を感じているのは、プラトンとアリストテレスが持っている書物です。

では、プラトン(写真2の左)が左手に抱えてる書物に注目してみましょう。その書物の背文字を判読すれば、“^{ΤΙΜΕΟΣ}ΤΙΜΕΟ”と読むことができるので、それから判断すれば、彼の自著『ティマイオス』であることに疑いの余地はありません。しかし不思議なことがあります。プラトンは古代ギリシア人ですから、もしその自著を持っていると想定するならば、ギリシア語で“^{ΤΙΜΑΙΟΣ}ΤΙΜΑΙΟΣ”と表記すべきです。ラテン語が公用語のバチカン宮殿内の仕事ですから、せめてラテン語名で“^{ΤΙΜΑΙΟΣ}TIMAEUS”と書いてあれば説明もできます。しかし“TIMEO”はイタリア語です。バチカンといえどもイタリアの中にあるといってしまうと、なるほどと納得もできますが、当時の時代背景から判断すれば簡単に片付けられる問題ではありません。それと同じことが、アリストテレス(写真2の右)の書物にもいえます。

アリストテレスが持っている本の背文字は、その一部が手のひらに隠れているためプラトンのものより判読しづらいのですが、通説では“^{ΕΤΙΚΑ}ΕΤΙΚΑ”と書いてあることになっています。それは、我が国の学界では『ニコマコス倫理学』と呼ばれている本です。当然、原題はギリシア語で、「ニコマコスの倫理学」を意味する“^{ΕΤΙΚΑ ΝΙΚΟΜΑΧΕΙΑ}ΗΘΙΚΑ ΝΙΚΟΜΑΧΕΙΑ”



▲写真2 二人の画像

です。ラテン語でも「倫理学」は“ETHICA”^{エティカ}なので、ラファエロが使っている“ETICA”もプラトンの本と同様にイタリア語なのです。

それでは、なぜラファエロは、古代ギリシア人の携える書物にギリシア語を使わないでイタリア語を使ったのでしょうか。確かにこの絵をシニカルな目線で見れば、ただラファエロの勘違いかギリシア語に対する無知から時代考証を誤ったに過ぎないと言い放ってしまうこともできるでしょう。しかしルネサンス芸術の中でも荘厳さにおいて屈指の作品『アテナイの学堂』に相応しい重厚なロマンを、この間違った背文字から読み取ってみましょう。

古代ローマ時代の日常語はラテン語でしたが、ギリシア語を使うのはエリートの証であったようです。それを証明するエピソードを一つ紹介しましょう。「ブルータスよ、おまえもか」といって死んでいったのはユリウス・カエサルでした。シェイクスピアの戯曲『ジュリアス・シーザー』では、“E tu, Blute”^{エトク ブルーテ}とラテン語で怒鳴ったことになっていますが、実際には、カエサルの叫びは“καὶ σὺ, τέκνον”^{カイ シュ テクノン}（息子よ、お前もか）とギリシア語であったという説が有力です。カエサルほどの人物は、死を間近にしても日常言語のラテン語ではなく、ギリシア語を叫んで死んでいったのでしょうか。

ローマ帝国の分裂(396)により、ギリシア語の使用は東ローマ帝国(ビザンティウム)の中だけに限定され、西ローマからは、最初は徐々に、最後には完全に消滅しました。

父親から徹底的にエリート教育をうけたダンテ(1265～1321)でさえもギリシア語を学ぶ環境にはありませんでした。ソネットの達人ペトラルカ(1304～1374)は、東ローマからバラムという学者を招いて近代ヨーロッパ人としては初めてギリシア語を習い始めたが、その先生は途中で帰国してしまったので習得することはできませんでした。最初のギリシア語習得者は、ペトラルカの友人で『デカメロン』の作者ボッカッチョ(1313～1375)です。彼は、1360年、東ローマからピラトウスをギリシア語教授としてフィレンツェに招き、近代ヨーロッパ人としては初めてギリシア語を習得しました。1453年、オスマン・トルコによってコンスタンティノポリスが陥落して、ギリシア語学者が大量に西ヨーロッパへ逃げて来ましたので、ギリシア語学習も容易になりました。そして1463年頃、メディチ家の援助を受けてプラトン・アカデミーが創設され、ギリシアの研究も盛んになってきました。ダ・ヴィンチ(1452～1519)もミケランジェロ(1475～1564)も、そして最も年少のラファエロ(1483～1520)も、当時のギリシア研究の本拠地フィレンツェで活動しています。それゆえにラファエロは、プラトンもアリストテレスもギリシア人で、彼らの著書がギリシア語で書かれていたことを知らなかったはずはありません。なぜ、ラファエロが『アテナイの学堂』に描いた二つの書名をイタリア語で書いたのか、その真意は私にとって謎です。やはり、ラファエロはギリシア語を知らなかったのか。たとえそうだとしても、誰かから教えることはできた筈です。そしてまた、わざわざイタリア語を使わなくても、せめて背文字を描くだけのラテン語能力ぐらいは持っていた筈です。私の推測にしか過ぎませんが、その理由を考えてみましょう。

ルネサンスという時代は、ギリシア語やラテン語を重要視する傾向がありました。しかしその反面で、自国の言葉を洗練し豊かな言語に成長させようとする運動も興り、イタリアにおいても自国語(vulgaris lingua)^{ウルガリス リングヴァ}で文学を創作しようとする気運も高まりました。イタリア語の重要性を主張してラテン語で『俗語論』を書いたダンテも、彼の大作『神曲』はイタリア語で書きました。ペトラルカもいくつかの叙事詩はラテン語で書きましたが、彼の名を後世に知らしめることになった抒情詩『カンツォニエーレ』はイタリア語の作品です。近代ヨーロッパ最初のギリシア語習得者ボッカッチョでさえも代表作『デカメロン』はイタリア語で書かれた作品です。その様な気運のさ中であって、ラファエロも、プラトンとアリストテレスの母国語ギリシア語ではなく、また当時のエリートの言葉ラテン語でもなく、あえて自国語であるイタリア語で二つの背文字“TIMEO”と“ETICA”を描いたのではないのでしょうか。

椎名麟三 著

『生きる意味』

(206頁) (社会思想社)



経済学部 教授
大野 隆



椎名麟三は1911年に兵庫県に生まれ、1973年に逝去した戦後作家である。この本は戦前、戦中に極限の体験をした一作家の人生の軌跡と思想とが素朴な言葉で語られているエッセイ集である。両親の離婚後、彼は16歳で家を出し、職を転々とする。やがて電車の車掌となるが、入社と同時に共産党の組織を作ろうとし、検挙され警察から拷問を受ける。何度かの拷問に耐えて、突然死の恐怖に襲われたとき、自分が信じていたものすべてが崩れていくのを感じ、自分がホントウには同志を愛していないことに彼は気づく。人間はホントウのものを求め、それがあのかのように演じて生きていても、現実の人生にはそれがない、と彼は自覚するようになる。ドストエフスキイの『地下生活者の手記』の中の歯痛になやむ男の話为例に、彼はこの問題を解こうとする。この男が心を打つのは「歯が悪くなればいたむようにつくられている人間全体が許せないからだ。」とか、「そういう人間でない人間を求めている自分を感じることができるからだ」と彼は述べる。文学が人間の救いに関係し、その救いは往々にして自然描写の内にある、とも彼は述べる。「このままで救ってくれ」と叫ぶドストエフスキイの作品中ののんだくれの言葉が彼の心を打つ。人間一般について<悪に対するやさしさ>の必要をさらに彼は語る。人間の救いの道を探ろうとするこの本は、その答えを出してはいないものの、深いところで共感できる一冊である。

三木義一 著

『給与明細は迷だらけ』

(248頁) (光文社新書)



経営学部 准教授
中村 壽男



こんにちはほとんどの企業で給与は銀行振込になっている。企業人には手元に給与明細が配られるだけである。その給与明細をまじまじとながめる方は少ないであろう。給与明細に記載されている項目を確認したり、ましてや記載されている数字が適正か否かチェックしたりはしないであろう。大半の方は手取額を確認するだけではないだろうか。

この本には、「サラリーマンのための所得税入門」とサブタイトルが付されている。日本の給与所得者は、毎月の源泉徴収に加え、その精算としての年末調整まで会社がしてくれるおかげで、税金のことをほとんど考えないですむようにされている。それゆえ、税制については多少の不満があっても、よくわからないから沈黙してしまう。日本の給与所得者がサイレント・マジORITYと揶揄されるゆえんである。

近い将来、社会に羽ばたく学生諸君には、就職・転職・独立、結婚、子育て・教育あるいは住宅取得などさまざまなライフステージにおいて自己責任が問われよう。源泉徴収・年末調整制度の下に課税関係が完了する現状では、自己責任意識など浸透するはずがない。この本は、諸外国に例をみない完全に会社任せの日本の源泉徴収・年末調整制度の是非を考えるよい機会になろう。

読書ガイド

読書ガイドでご紹介した本は図書館にあります。ぜひ一読ください。

中村 剛著
『井深八重の生涯に学ぶ
—“ほんとうの幸福”とは何か』
(117頁) (あいり出版)



人間生活科学部 教授
星野 政明

「井深八重」という女性をご存じだろうか。若い学生諸君は、ほとんど知らないかもしれない。かつて、アメリカの週刊誌『タイム』(1975年)に、「マザーテレサに続く日本の天使」と紹介され、NHK等のテレビ番組でも紹介された。



1923年から、当時まだ偏見の強かったハンセン病の療養所・神山複生病院に看護師として勤め、その生涯を捧げた女性である。

きっかけは、思いがけない出来事からだった。彼女は、衆議院議員を父に持ち、元・明治学院大学の総理(学長)が伯父、ソニー創業者の井深大を親戚にもつという名門の出であった。そして、同志社女学校(現・同志社女子大学)英文科を卒業、長崎の高校の英語科教師として赴任した。そのときに、ハンセン病と診断され、神山複生病院に入院(当時の状況からいえば、半ば強制的に)することになるのである。ところが、まもなく、誤診とわかる。親族は、すぐにでも帰宅するように勧めたが、断り、看護師としてその病院で、ハンセン病患者とともに一生を過ごしたのである。

筆者は、こうした井深八重の歩みを紹介するだけでなく、なぜ、「ハンセン病は誤診であった」と告げられたあとも、看護師資格を取って神山複生病院に残ったのだろうか、と追求(筆者のことばでは「対話」)する。

晩年は、さまざまな栄誉に輝いた(ナイチンゲール記章受賞、朝日社会福祉賞受賞等)彼女だが、自身のことはほとんど語らなかつた女性だけに、さまざまな資料、談話等から推測する。環境の影響もあったのだろう。同志社時学校でのキリスト教信仰、神山複生病院の院長であったレゼー神父との出会い、何よりも自身が患者として入院していたときに見た、ハンセン病患者の姿。

そうした中で、彼女に一生を貫かせたのは、単なる「献身」ということではなく、自身の求めた「ほんとうの幸福」だと筆者は述べる。その中身については、この書籍に当たってもらってもいいし、学生諸君が個々人で考えてほしい。

1989年永眠。井深八重の遺骨は、神山複生病院の墓地に患者とともに埋葬されており、墓碑名は「一粒の麦」と記されているという。

石原 俊著
『近代日本と小笠原諸島』
(533頁) (平凡社)



短期大学部 教授
日比野 光敏

ダニエル・ロング 編著
『小笠原学ことはじめ』
(334頁) (南方新社)

知り合いの息子さんが本を出したというので買って見たのが『近代日本と小笠原諸島』である。これは京都大学に提出した博士論文に手を加えたものだから、一般受けのするものではない。私にしても社会学の話は専門外で、きわめてむずかしい内容である。



それでも目次くらいは読んでみようと思ひ、パラパラとめくるうち、「カナカ系のケテさん」とか「ジェフレイさんの終戦」とかいう文字が飛び込んでくる。「あれ、小笠原諸島って日本だよなあ?」



恥を話すようだが、私はそれまで小笠原諸島のことを知らなかつた。いや、八丈島よりはるか南にある、とか、島には飛行場がなく、行くためには東京から丸一日以上かかる、とかいうことは知っていた。でも、それだけである。あまりにも知らなさすぎる…。

さっそく『小笠原学ことはじめ』という本を買った。これは文字どおり小笠原諸島に関する「ことはじめ」で、その民族や文化・社会や外交などが解説してある。そして、その「特異」な歴史がわかるようになった。

驚いたのは、小笠原には欧米人がいたことである。たしかに江戸時代からヨーロッパ人や南洋人が住んでいたが、明治9年、国際法上、日本に領有が確定した。本来ならば欧米人は欧米に帰らせるのであるが、日本は、こともあろうに、その時島に住んでいた欧米人たちも「日本人」にしてしまったのである。

以後、日本は戦争を体験する。そして敗戦。その後はアメリカ統治…。小笠原は強制収容でだれも住めなくなつたが、やがて「欧米人である日本人」だけは帰島できた。そうして昭和43年、小笠原は日本に返還される…。ちっとも知らなかつた……。

まだこれらの本は読み終えていない。きっとその「過去」に驚きながら、ページが繰られていくことだろう。



浅田 次郎 著『壬生義士伝』を読んで

人間生活科学部 平松 良太

小学生の時から歴史に興味を持ち、自然と新撰組が大好きになっていました。新撰組の本というと司馬遼太郎、とイメージする人が多いと思います。しかし、自分が紹介するのは「ぼっぼや」で有名な浅田次郎さんの「壬生義士伝」です。この本では新撰組の局長、近藤勇が主人公でもなければ副長の土方歳三が主人公でもありません。吉村貫一郎という新撰組だけでなく、歴史上にはほとんど顔をださない新撰組の隊士が主人公なのです。皆さんは武士にどのようなイメージがあるのでしょうか？個人的なイメージであれば「頑固」「厳しい」「プライドが高い」「金に無頓着」というイメージがあり、情けない姿をさらすぐらいなら切腹という尊厳死を望むイメージもあります。しかし、吉村貫一郎は優しく、守銭奴であり、生き残

るためには無様な姿もさらす「人間くささ」をもった人物です。大義名分があって人を斬ったり戦ったりする武士ですが、吉村貫一郎は「死にたくないから人を斬る」と言う武士らしくないことを言います。しかしとても現実的であり、生きるために戦うといった姿を感じとれました。吉村の家族を思う気持ちや人間くささがこの本の読みどころだと思います。壬生義士伝は映画にもなっており、吉村役を中井貴一さんが演じていますが、原作のイメージどおりになっており、本→映画の順で読むとより楽しめると思います。大河の龍馬もいいですがやっぱり新撰組もいいです。今までの新撰組で飽きた人も、新撰組を知らない人も感動できる作品ですのでぜひ読んでみてください。



湊 かなえ 著『告白』を読んで

法学部 江坂 美咲

私は、今年映画化された湊かなえさんの『告白』を読みました。この作品は五人の視点から一つの事件を描いており、さらに、その一つの事件が様々な連鎖を起こして周囲を巻き込んでいくといったものになっています。先生の娘を殺したのは、誰？先生の娘が殺されたのは、なぜ？「私」の子供が人を殺したのは、なぜ？また殺人が起きたのは、なぜ？謎の核心に触れるため、娘を殺された女教師は

復讐を始めます。命とは何か、どういうものか。命の尊さを改めて認識させられました。



私は、ミステリー物は好きじゃないのですが、この『告白』はとても読みやすく好きです。他にも、湊かなえさんの『贖罪』という作品も読み、書かれた小説はどれも素晴らしいと思います。みなさんも是非読んでみてください。

岩崎夏海著『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの「マネジメント」を読んだら』を読んで

経営学部 山田 祐歌

これは、ある女子高校生がひょんな事をキッカケに高校野球の女子マネージャーを引き受ける事になり、マネージャーとはどのようなものかと考え探している時に、本屋さんで経営学の父と呼ばれるドラッカー著の「マネジメント」という本に出会った事から物語が始まります。

この本の面白い所は、まず何の関わりもなさそうに見える2つの事柄が、上手く噛み合って話が進んでいく事にあります。そもそも、高校野球と「マネジメント」とは、普通に考えれば全く結びつかない事柄だと思えます。しかし、登場人物である女子マネージャー川島みなみは、この「マネジメント」という本を頼りに、無名の野球部を甲子園へ出場出来る部へと変化させる計画を進めていきます。1番最初にこの本に対して私が思った事

は、全く違うマネージャーの仕事とマネジメントをどのように結びつけて、どう解釈し展開していくのかと興味津々でした。

本を読み進めていくと、まずこの本の凄さに驚かされました。野球には全く関係ないであろうマーケティングであったり、イノベーションについても、しっかりとドラッカーの「マネジメント」が野球部のマネージャーの仕事に生かされているのです。また、それらが高校野球という身近な事柄を使って説明する事によって、これから経営学を勉強したいと考えている人、経営学初心者の人、また、現在勉強していて分かりづらいと思っている人でも読みやすくなっているのでお勧めです。



島田 洋七 著『佐賀のがばいばあちゃん』を読んで

短期大学部 本山 ゆり

「佐賀のがばいばあちゃん」と聞いて、知らないと答える人は少ないであろう。あの有名な漫才コンビ「B & B」であった島田洋七が、今から40年ほど前に佐賀のがばい（すごい）ばあちゃんに預けられ、貧乏ではあっても、波瀾万丈なばあちゃんとの冒険のような暮らしの中から、人間の本当の幸せというものを学んでいくという物語である。

映画やドラマにもなり、一躍有名になった「佐賀のがばいばあちゃん」は、この世の中の人々に、幸せは、お金で決めるのではなく自分自身の心のありかたで決まるのだと教えてくれたであろう。

島田洋七を育てたがばいばあちゃんは、楽しく生きるための素晴らしい言葉をたくさん残している。私がその中でも一番好きな言葉は、「通知表は、0じゃなければええ。1とか2を足していけば5になる!」という言葉である。飛び抜けて何かができたり、才能があ

るということではなくても、その人の中の良い所を少しずつ合わせれば、才能のある人、天才といわれる人にも劣らない素晴らしい一人の人間であり、誰も平等であるのがばいばあちゃんは教えてくれている。

保育者を目指している私も、この言葉を聞いて子どもたち一人一人の良さや苦手を発見し、子どもを全体的に見ることで、子ども達の底知れないパワーを十分に引き出していけるようになりたいと感じた。

がばいばあちゃんは、この他にもたくさんの言葉を残している。悩みがあったり、前に進めなかったり、自分自身が分からなくなったとき、この本を読んでほしい。私はこれから、がばいばあちゃんからの元気で幸せに生きられるヒントを胸に、保育者としての道を歩んでいきたい。



「図書館報」 発刊60号を迎えて

図書館長 新美 治一

名古屋経済大学・名古屋経済大学短期大学部図書館の「図書館だより」は、本号で、第60号になります。市邨学園大学図書館報「白穹」^{はつきりゅう}創刊号が発行されたのが、1980年9月ですから、30年にわたって年2回、発行してきたことになります。「図書館だより」に直接に係ってこられた人々の喜びと苦勞が伝わってくる記念号です。そして、何よりも、ご協力を頂いた諸先生や学生たちに、心からお礼を申し上げます。

本学の図書館は、およそ34万3千冊の蔵書、視聴覚資料約5千点、閲覧できる電子ジャーナルが60点、データベース15点を収蔵・利用に供しています。また、図書館関連施設（閲覧室・グループ閲覧室・個人閲覧室・図書収蔵庫・事務室等）やインターネットでの検索システムは、教員・職員・学生の需要に十分にこたえられる体制ができあがっているのも特徴です。

図書館を利用されているのは、本学の関係者のみではありません。地元の犬山市との交流協定に基づき、市民の方々の利用が毎年増えてきています。1階のエントランス・ホールでの「催し」は、質の高さで好評です。月末の休館日には、このホールがピアノのコンサート・ホールになり、本学の学生が、いつもは鎮座しているだけのグランド・ピアノに向かい、ショパンの「戦場のピアニスト」の主旋律を奏でています。来館していただいた方々には、至福のひと時を過ごして頂いています。

「図書館だより」は、このように種々・図書館に係る情報発信誌です。それと同時に、教員の方々には、利用された海外の図書館の紹介や推薦図書を挙げていただき、学生の感銘を受けた「図書」の感想文を掲載しています。いってみれば、「図書館だより」は、文化のみなもとの発信地として、重要な役割を果たしている、と自負しています。

「図書館だより」は、先生方のご協力を頂きながら、これからも自らのミッションを自覚しつつ、定期的に発行されていくことになります。学生たちにも協力を頂き、広く読まれ、愛されるものにしていきたいと願っています。よろしくお願いいたします。

■大盛況！

今年の名経祭（10月23日・24日開催）での図書館イベントは“絵本の読み聞かせ”と教員バンド“B&Eplus”によるホットな演奏会でした。

また名経祭にあわせて“市邨幼稚園児作品展”も開催いたしました。3歳児（年少組）、4歳児（年中組）、5歳児（年長組）約200名の「家族」をテーマにした作品を図書館1階のエントランスホールに展示し、名経祭のオープニングに参加した年長児とご家族を図書館に招いて同展を鑑賞していただきました。当日は1000名を超える入館者となり大盛況でした。この作品展は11月末日まで開催しております。



▲教員バンド“B&Eplus”演奏の懐かしのメロディーの数々



▲絵本の読み聞かせをする市毛愛子先生（短大保育科）



▲市邨幼稚園児作品展を鑑賞する方々

図書館だより Vol.60 2010.11

発行所 名古屋経済大学 図書館 〒484-0000 愛知県犬山市樋池 61-22 TEL (0568) 67-3798 (代)
名古屋経済大学短期大学部 ホームページ <http://www.nagoya-ku.ac.jp/lib/index.html>
発行 年2回
印刷所 株式会社 一誠社 TEL (052) 851-1171